

昨年11月中旬、千葉県東金市の県立東金病院会議室で活発な論議が続いていた。2年間の初期研修を終えて同病院で後期研修中の医師1人を、さまざまな年代の住民約10人が囲み、がんの告知について注文をつけていた。

特定非営利活動法人（NPO法人）「地域医療を育てる会」と同病院が協力して、2007年春から開く「医師育成サポーター制度」による意見交換だ。研修医1人が1年間毎月1回、サポーターの住民と対話する。医師はコミュニケーション能力を、住民は医療知識を高めるのが狙いだ。

「患者が高齢者なら、本人ではなく家族に説明する」と話す医師に、住民は「がんとはっきり言ってほしい」「高齢者でも趣味があり前向きに生きている人は（告知に）耐えられる」と主張。互いに30分ほど意見をぶつけあった後、医師は「今後の診療の参考にする」と締めくくった。

サポーターの1人、同県茂原市のグループホームで精神障害者の就業を支援する千葉一さん（47）は「医療が身近になった。医師や市民らいろいろな意見を聞き、仕事に生かしている」と話す。

この日初めて見学した東金市の城西国際大学の秋元雅之薬学部長は「住民との対話は、薬剤師にも参考になる。学生に参加を呼びかけたい」と語った。

■□■

1年間の同制度を“修了”した医師はこれまで2人。うち1人は、昨年4月から鹿児島大学病院心身医療科で学ぶ蔡（さい）明倫（みんるん）医師（30）＝大学院博士課程1年、千葉大卒＝だ。

一番の思い出は、血液検査や点滴の際にまれに起きる、しびれなどの合併症についての論議という。

「合併症を知ると、採血を拒否する人が増える可能性がある」という蔡医師に対し、住民は「採血の危険は知らせる必要がある」。4カ月の議論の結果、住民の意見を取り入れ、合併症が起こる可能性があるという文書を採血室に張り出すことになった。

現在、向き合う心身医療科の患者は、病院を複数受診しても体調不良の原因が分からず、医療不信になっている人が少なくない。

蔡医師は「生活環境を知った方がいい治療ができる。どうすれば患者がすべてを話してくれるか考える。もっと笑顔があった方がいいと、東金病院で住民からアドバイスを受けたことが、現場で生きている」と明かす。サポーター制度が診療現場を変えつつある。

■□■

鹿児島では昨年、研修病院や行政が集い、充実した研修を進める「初期臨床研修連絡協議会」が発足。県医師会も研修医の生活などを支援する独自の基金を創設、医師確保の体制が整いつつある。

地域医療再生を学び、鹿児島に還元したいと、東金病院に赴任して間もなく3年となる古垣齊拓（なりひろ）医師（37）＝肝付町出身＝は訴える。「再生には住民を巻き込んだ

地域の連携と、医師を育てようと強い意志を持つ病院づくりが欠かせない。学べる環境があれば医師は集まる」

（社会部・浦牛原健）

＝おわり＝